

今年9月、横手市の秋田県立近代美術館で一風変わったタイトルの展覧会が開催される。鴻池朋子「ハンターギャザラー」。人類学用語で狩猟採集民を意味する言葉をタイトルとしたこの展覧会をおこなうアーティストに話を聞くため、埼玉県にある秘密基地のようなアトリエを訪ねた。



“視覚とは異なる
新しい感覚を
この展覧会で
開いてほしい”



上／《隠れマウンテン》2008年
下／《シラー 谷の者 野の者》2009年

—なぜ展覧会名を「ハンターギャザラー」とされたのでしょうか？
鴻池 ハンターギャザラー (Hunter Gatherer) というのは、1970年代に人類学や民俗学の世界で、ずいぶんはやった言葉だそうです。人が仕事をしてものをつくったり、料理をつくったりする時、最初は、どこからか何かを持ってきますよね。アイデアを寄せ集めてきて一つのものをつくった。その原型が、「狩猟採集」。つまり「ハンターギャザラー」にあるのではない

現代アーティスト

鴻池朋子

TOMOKO
KONOIKE

かと考えたんです。
—なるほど。少し難しそうな学術用語だったんですね。
鴻池 最近フィンランドに行った時に、日本人の民俗学者とお会いしました。1980年代前後にペンシルバニア大学で学生だった方です。このタイトルを付けようと思っていると話したところ、「いやー、懐かしい」という反応が戻ってきました。当時は民俗学とか人類学が非常に脚光を浴びた時代でもあったんです。



上／「物語るテーブルランナー」作品
下／「根源的暴力」展示風景

